

P. D. Huet の『小説起源論』

中 川 勇 治

西独の J. B. メッラー社は歴史的な文芸理論の覆刻に熱心な出版社であるが、1966年同社の叢書の中に Pierre Daniel Huet の „Traité de l'Origine des Romans“ (1666年成立, 1970年公刊) を加えた。このいわゆる「忘れられた原典」が執筆後三世紀を経た今日、再び一般読者に接近可能とされたのは、単なる懐古趣味によるものとは思われない。もちろん300年前の論文が俄に現代的意義を獲得する筈もない。おそらく、今日一つの巨大な文化現象にまで発展した小説ジャンルを、その誕生の時期に始めて理論化し擁護した Huet の歴史的意義を評価したものであろう。事実、彼の『起源論』は母国フランスのみならず、ほとんど汎ヨーロッパ的な規模で近代小説理論の形成に影響を及ぼしたが、就中、ドイツ語文化圏では18世紀中葉、たとえば Gottsched の „Versuch einer critischen Dichtkunst“ (1751年) に至るまで、小説美学の方向を規定していたのである。⁽¹⁾ ドイツが外来理論の盲従を脱して独創的な小説理論を樹立するのは、Blanckenburg の „Versuch über den Roman“ (1774年) においてである。また小説とは虚偽そのものであり、道徳的退廃と精神的墮落の原因をつくるときめつけた特異な反小説論 „Mythoscopia Romantica“ (1698年) は、Huet の影響なしには考えられない著述である。禁欲的なスイス改革派教会の牧師であった著者 Gotthard Heidegger は、舌鋒するどく小説の害毒を弾劾するが、その随所に『小説起源論』の作者を意識している。⁽²⁾ カトリック司教 Huet の手になる小説擁護論が存在しなければ、一種の神学論争とも言えるこの小説否定論はそもそも書かれなかったことであろう。いずれにせよ、Huet の『小説起源論』はドイツ語圏における歴史的な小説理論の形成を考察する場合、度外視

(1) Hillebrand S. 79f.

(2) Heidegger, Vorbericht XXIII, Discours S. 15 und S. 18

できぬ記念碑的な著述であると考えられる。こうした意味合いから、筆者は前述の覆刻版を手掛りに、Huet の小説論及び小説観を探ってみようと思う。

『小説起源論』は題名の示す通り、小説の起源や変遷を歴史的に叙述したものであるが、小説ジャンル自体についての理論的考察も随所に散見する。ここではその整理と再構成を試みることにする。

1. 定 義

Huet は論考の展開に先立ち、自分の取り扱う小説の定義を与えている。これは論文全体との関連や他の補足部分から見ると、彼の小説理論の中心をなす部分と見做し得るので、引用の長さをいとわず紹介してみよう。

「今日、正当にも小説と称されるものは、恋愛を内容とし、芸術的な散文で書かれ、読者の楽しみと教養を目的とした作り話である。作り話といったのは本物の歴史と区別するためであり、恋愛とつけ加えるのは、恋愛こそ小説の主題となるべきだからである。さてこの作り話は、現代の用語法に従えば、散文体を取り、芸術的に、しかも一定の規則に準じて書かれねばならない。さもなければ（書いたところで）秩序も美しさも持たぬ混乱しきった素材の寄せ集めに過ぎない。小説の主要目標、あるいは少くともそうあるべきもの、また小説を書く者が当然留意しなければならぬことは、読者の教育である。すなわち、読者に対しては常に美德の勝利と悪徳の懲罰を提示する必要がある。しかし人間の精神は元来、教育を忌み嫌い、その生来の欲望も指導には逆らいがちであるから、楽しさという誘いでそれを欺き、受け容れやすい例を示して教訓の厳格さをやわらげ、ある人間の欠点を矯正する場合には、他人の例によって批判するという方法をとらねばならない。だから、一見、小説の大家が目指しているかに思われる読者の気晴らしも、実は主要目標に従属するものでしかない。主眼はあくまでも精神の教育と風俗の醇化である。小説は、この定義と目標にどの程度近づくか否かによって、正則ともなれば変則ともなる。」(S. 4 ff.)

以上が Huet の小説概念であるが、彼はさらに言葉をついで、もっぱらこの概念規定に従った作品のみを考察の対象にすると断言する。結局、彼の定義は

現存する文学現象の中から小説ジャンルを帰納的に導き出した、あるいは記述したものではなく、「規則に準じた小説」(les Romans réguliers)を樹立しようとする観念的な要求と言えよう。しかしながらまさにこの観念的な規定が、文芸の世界における小説の市民権獲得を可能にしたとも考えられる。Huet は古典学者としての深い造詣から、アリストテレス以来の文芸の規則性という観念を援用して、小説のあるべき姿を描き出し、小説が文芸の庶子として認知される道を拓いたのである。特にアリストテレスの詩学第九章を根拠にして、小説の作者達を詩人の仲間に加え、いわば小説の成人宣言を行ったことは、Huet の大きな功績と評価されている。⁽³⁾

…et que suivant la maxime d'Aristote, qui enseigne que le Poëte est plus Poëte par les fictions qu'il invente, que par les Vers qu'il compose, on puisse mettre les faiseurs de Romans au nombre des Poëtes. S. 6⁽⁴⁾

これは小説発展史上の記念すべき文章である。

2. 定義の敷衍ならびに評釈

上に挙げた定義に含まれる個々の要素を抜き出し、項目ごとに整理すると、文体、構成、目的、起源、および主題の五つになる。以下この順序で Huet の補足説明を求め、その注解を行うことにする。

A. 文 体

Huet が散文をもって小説の文体と明確に規定したことは注目に値する。いかにも、たとえばドイツでは、彼のこの規定にもかかわらず、18世紀前半に至るまで、小説が散文と結合していることを理由に純文芸の一員として承認されなかったが⁽⁵⁾、散文が十分に芸術作品の担い手になるという彼の指摘は卓見である。彼が散文を強調した根拠の一つは、イタリアの Giraldi 等が韻文で書かれた De Romanzi をも小説と名付けたことへの反発であるが (S. 4)、反面、

(3) Hinterhäusers Nachwort zu dem hier benutzten Text S. 13*

(4) Aristoteles' Poetik S. 39

(5) Kayser S. 6

彼自身の散文の見方を反映するとも解される。たとえば彼は、歴史的記述の中で Heliodore をギリシヤ小説家の中で最も高く評価し、叙事詩人のホメロスにも比肩すると判断するが (S. 34), その文体については, Achillés Tatiüs に較べて, 不自然でわざとらしい (forcé) と批判し, 後者の素直さ, 自然らしさを称揚する。Huet はこの論考自体の中では, 感覚的な文体評価の言葉を洩らすのみで, 自己の文体論を述べはしないが, 別の著述 „Huetiana ou Pensées diverse de M. Huet“ (1722年) の中で, いわば時代に先駆けた散文尊重の見解を明らかにしている。⁽⁶⁾ 1798年シラーがゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に深く心惹かれながらも, 散文は「非文学的な厳肅さ」を生み出す「むき出しのリアリズム」の原因となると考えて, 小説の世界に背を向けたことを思うと,⁽⁷⁾ Huet の散文観がいかに新しいものであったか理解できよう。

B. 構成

小説は一定の規則に従い, 構成の面でも全体を通して明確な統一性を持つべきだという要求は, 歴史的な事情から提出されている。すなわち, 16世紀のイタリヤでアリオストの „Orlando furioso“ (1516年) を契機に始まった小説の理論的考察が問題視した事実は, Romanzo と呼ばれるこの種の物語がアリストテレス流の叙事詩規則とは合致しない要素を含んでいることだった。Romanzo は叙事詩本来の特徴とされる統一性を欠き, 相互に内的な関連を持たぬ事件がバラバラに押し込まれた奇妙な寄せ集めに過ぎなかった。17世紀後半のフランスでも専門家的な小説批判はやはりこの構成の無秩序を取りあげている。⁽⁸⁾ Huet が「規則に準じた小説」という理念を提出するのは, もちろん, 一つにはこの時代を支配した古典的規範思想の現われでもあるが, 現実に小説の名を冠して生産される読物と本格的な小説の違いを明示したい気持も強く働いていたようだ。彼の規範観念はあくまでもギリシヤ古典期のそれを根拠とする。そのため小説をも英雄叙事詩の規則に照らして判断しようとする (J'appelle

(6) Hinterhäuser S. 19*f.

(7) Kayser ebda.

(8) Koskimies S. 137ff

reguliers, ceux qui sont dans les regles du Poëme heroïque. S. 56)。従って彼は古い時代のフランスの小説家達が話の筋をやたらに複雑に展開させたことを欠陥と断じ、「秩序もなく、相互の結びつきもなく、技巧もない」(sans ordonnance, sans liaison, et sans art. S. 44) ときめつける。彼が要求する小説の構成は一つの有機的な統一体である。Huet は一個の身体を例に挙げてこの統一性の観念を説明している。それによれば、小説とは一個の完全な身体であって唯一の頭部を持ち、その他の部分は胴体、四肢などとして頭部を支持しまた服従する。つまり小説の中では主要な筋 (l'action principale) だけが特異で顕著な位置を認められ、他の二次的な事件はいずれもその補助と引き立ての役割を持つ。四肢その他の肉体部分は常に頭部と結びついて働き、頭部の美しさや品位を高めるのがその機能となる。もし各部分がそれぞれの独立を主張し、相互の関係を認めないとすれば、小説は多頭の怪物と化し、畸形となってしまう (S. 44f.)。この小説有機体論の典拠は言うまでもなくアリストテレスの詩学である⁽⁹⁾。従って Huet の主張も、三一致の法則に近づくが、元来、有機体とはその本質上どの部分を除去しても全体として成立不可能な構造を意味するから、小説の各部分は相互に緊密で必然的な関連をもって配置されねばならない。かくて小説の進行とは、単純にその時間的継起の順序に従って叙述することではなくなる。Huet が Longus の『ダフニスとクロエー』を非難する一つの理由はこれである。「ロンゴスは荒っぽく牧童達の誕生から話を始め、彼等の結婚で話をやめる。牧童達の冒険の解決にはいつもまずい機械仕掛だけをあてにしている」(S. 52f.)。総じて Huet は小説の手法として „in medias res“⁽¹⁰⁾ を好み、ロンゴスの例に見られる „ab ovo“ を退けるが、これは小説有機体説の当然の帰結であろう。1920年代ヴァージニヤ・ウルフ等は現実の正確な再現を意図し、いわゆる意識の流れの捕捉こそ芸術家の任務であると標榜して、芸

(9) Aristoteles' Poetik S. 38

(10) Kayser S. 6. Siehe auch: Heliodor: Die äthiopischen Abenteuer von Theagenes und Charikleia, in der Universal-Bibliothek Nr. 9384-88 vom Verlag Reclam.

術における人為的要素を排除しようとした。⁽¹¹⁾この影響のためか、現代では物語の筋を軽視した、あるいは否定したと主張する小説が多くなり、Huetの要求した統一性ある小説のいわば対極が出現している。しかし、曾って Eichendorff がその文学史の中で「気の狂った実用百科事典」と評した16世紀の小説を念頭⁽²¹⁾に置くなら、この小説統一体説は十分に歴史的意義を持っていたのである。

C. 目 的

定義によれば、小説の掲げるべき目標は読者の楽しみと教えであるが、前者は後者に従属する、もしくは後者の手段であると規定されている。一種の勸善懲惡思想であって、現代の小説観より判断すれば、甚だ一面的な目標設定として拒否されるかもしれない。しかしながら、Huetが小説による読者の教育、教化を前面に押しだしたことは、結果として小説の擁護につながり、小説が存在理由を獲得する第一歩となったのである。17世紀、いや18世紀に入っても、小説と名乗って登場した物語類の大半は低次元の娯楽読み物で、読者の感覚をくすぐり、道徳観念を麻痺させ、情念を刺戟するのみと批判されていた。その反道徳的な影響は夙に指摘され、識者は小説攻撃の手をゆるめなかった。17世紀に主としてフランスで発表された小説論が殆ど反小説論であったことは自然の成り行きであった。⁽¹³⁾このような小説非難の嵐の中で、あえて小説弁護をするためには、世人よりも識者（古典学者や教会）を納得させる論拠が必要だったのである。Huetが「規則に準じた小説」を強調し、アリストテレスを典拠とするのもそのためである。従っていま小説はその反社会的作用によって弾劾されている以上、弁護論としては当然、小説の社会的効用、すなわち読者の教育、教化という機能を必要以上に力説しなくてはならない。カトリックの司教という立場から道徳的関心を示すのは当然だが、本人自身はかならずしも小説に道学者めいた教化作用のみを要求していたとは思われない。たとえば、定義の中

(11) Kayser S. 29f.

(12) J. F. v. Eichendorff: Geschichte der poetischen Literatur in Deutschland 1906, S. 123 (Nach der Angabe in "Deutsche Literaturgeschichte in einem Band", Herausgegeben von J. Geerdts, Berlin 1965)

(13) Koskimies S. 140f.

でも「読者のたのしみと教え」(pour le plaisir et l'instruction) という順序で小説の機能を挙げ、その後の敷衍のところで改めて教育作用を主要な目標に仕立てあげる。またさらに Huet は定義に先立って小説を「尊敬すべき怠け者たちの快適な気晴らし」(cét agreable amusement des honestes paresseux S. 4) と呼んでいる。H. Hinterhäuser の解説によれば、Huet は、若い貴婦人の私室で小間使に髪を結わせている当の女性を相手に流行の通俗小説を朗読したこともあるという⁽¹⁴⁾。彼が道徳観念に凝り固まった説教者タイプの人ではなかったと推測される所以である。彼が論文の93ページ以下で比較的詳しく小説の教育作用を説明しているところを読めば、教育という主要目標は決して、表面的な偏狭な意味に限定されていないのである。彼の小説擁護の中心をなす一節であるから、以下概略を紹介する。

「しかし私は小説の読書を非難するつもりはない。この世の中では最良の事物といえども必ず不都合な側面があるものだ。だから小説が無知よりさらに悪い弊害を惹き起こすこともあり得る。もちろん私は小説に向けられた非難をよく承知している。小説は信仰心を枯らし、みだらな情念を掻き立て、良風美俗を紊乱させると攻撃されている。こうしたことは起るかもしれないし、また事実起ったこともある。しかし悪しき精神によって悪用されない物事など存在するだろうか。弱い心はみずから毒にまけるものだし、どんなものでも毒に変えてしまう。そういう脆弱な人間に対しては、小説よりも、害毒だらけの実例をこと細かく述べ立てる歴史の方こそ禁止すべきである。……素朴な田舎の人々なら仰ぎ見るたびに信仰心を深めるような大理石像が、若者の心を掻き乱し、残酷さを煽り、あるいは意気銷沈させたこともある……ギリシヤやフランスの古い時代の小説は、よく知られているように、その時代の悪習に染まってあまり良風美俗の維持に意を用いなかった。『アストレ』やそれ以後の小説にもやはり放埒なところがある。しかし今の時代に書かれた作品には——もっとも私は良書のことのみ問題にしているのだが——こうした欠陥はない。そこには貞淑

(14) Hinterhäuser S. 5*

な耳を汚し、高潔な心を侮辱するような言葉も表現も見い出せぬであろう。また現代小説の恋愛描写が余りにも精妙で、読む人の心情に阿るところがあるため、若い人々はたやすくこの危険な感情の誘惑にのってしまふと言われるなら、こう答えよう。小説を読むことは危険でないばかりか、必要なのだと。そもそも世間に出て行く若い人々が、罪深い情熱の呼び声に耳を借したり、その危険な罠に落ちこんだりせず、清純にして神聖なる目的を持つ真の愛の中で正しく振舞うためには、愛という感情がなんであるかを弁えておかねばならない。恋について深く知らぬ者はいとも容易に恋の病に罹り、全く無知な者はもっとも手ひどく恋に欺かれるとは、世人の経験が教えるところである。つけ加えるが、精神の錆を落して清新さを取り戻し、世の中にうまく適応してゆくには、すぐれた小説の読書に如くものはない (*Adjoutez à cela que rien ne déroïlle tant l'esprit, ne sert tant à le façonner et le rendre propre au monde, que la lecture des bons Romans. S. 96*) 小説こそ大学時代の教授の後を引き継ぐ無言の家庭教師であり、しかも前者よりもはるかに上手に、わかり易く、人前での話し方や世の中での生き方を教えてくれるのである。してみると Huet の意図する道徳的教化の内容は、いわば感情教育に近く、特定の宗教的観念と結合する性質のものでない。また彼の小説擁護が偶然の結果ではなく、明白な意図によってなされたことも疑いない。

D. 起 源

定義の中で Huet は人間が生来怠惰で、現実の直視を恐れ、厳しい認識を回避しがちだと述べ、小説における娯楽的要素の理由づけを行うが、これをさらに詳しく説明したのが、論文82ページ以下の人間本性論である。それによると、小説愛好の素地である空想的な話に興味を持つ傾向は、万人に共通した天性で、習い覚えた才能ではなく、人間の精神や魂のあり方に由来する。物事を理解し認識したいという欲求、つまり理性の活動は人間固有の現象であり、他の動物との区別を示す大きな特色である。理性の働きがある種の動物にも認められないこともないが、それはいずれも不完全で、認識への欲求 (*l'envie de connoître*) は人間においてもっとも顕著なものである。その原因と考えられるのは、人間

の心的能力が本来甚だ広く深い容量を備えているため、現前の対象だけですっかり充満してしまうことがないという事情である。心はこの充満を望んで、過去や未来、真実や虚偽、さらには、想像や不可能の世界にまでその対象を追い求める。動物は感覚によってとらえられる事象だけで魂を満たし、それ以上は進まないが、人間の精神は決して落着くことのない渴望 (*avidité inquiète*) によって絶え間なく刺戟を受ける。これこそ人間が自分の能力と対象の均衡を得るため常に新しい認識を求めて突進む原動力なのである。認識の喜びは、激しい飢餓や長い間の渇きを満した時の喜びと似ている。人間独得のこの認識作用は、プラトンが Porus と Penie の結婚という寓話によって表現したことであって、いわば「富裕と窮乏の結婚」であり、そこから喜びが誕生する。認識の対象がこの富裕に相当するが、富裕とは実際に用いられる場合にのみ、本来の豊かさを発揮するのであって、認識能力、つまり窮乏の働きかけがなければ喜びという子供を生まない。窮乏も富裕から切り離されている限り、常に不安定である。両者の結合によって始めて認識の喜びが誕生するのだ。

窮乏、言い換えれば、無知 (*l'ignorance*) は元来人間の心にとって自然な状態だから、心は常に知 (*la Science*) に憧憬を抱く。無知が知を所有するとき喜びがその受用に伴う。しかしこの喜びはいつも同じようには出現するのではなく、対象の性質によっては努力や苦勞が必要となってくる。たとえば、対象が感覚ではとらえられぬ抽象的なものであれば、困難な思弁や複雑な操作が認識に伴う。だが人間が勞苦を嫌うのは天性であるから、心がこうした厄介な認識 (*connoissances épineuses*) に到達する道は、その成果を遠方に望んでみずからを慰めるか、あるいは必要やむを得ざるものと覚悟するかのどちらかしかない。

ところで、心が魅了され、他にまさって歓迎する認識とは面倒な悟性的手続きを要せず、想像力の働きだけで容易に取り込める認識である。それが、人間的行為すべての原動力である我々の情念を刺戟し、興奮させるような認識であれば殊の外に歓迎される。これこそまさに小説の働きなのだ (*C'est ce que font les Romans*)。

小説を理解するには、精神の緊張も面倒な推論もいらぬし、記憶力を疲労させる必要もない。想像を働かせるだけでよいのだ(il ne faut qu' imaginer)。

小説の作用は人間の情念を揺り動かすことによって、かえって本来の情念を鎮静させるものである。我々は小説を読んで不安になったり、同情の念にかられたりするが、これは我々の実際に愛している人々が危険や困窮の外にいて安全だということを知らすためである。小説とは仮象の世界であって、現実の情念の働きを浄化させるためにある。だから我々の情念は気持よく興奮させられるか、鎮められるかのどちらかである。従って理性よりも情念に従って動く人間や、悟性よりも想像力を働かせる人間の方が小説をもっともよく理解するのである。こういう読者は子供や素朴な人々なので、感銘の深い、情念を刺戟するものによってのみ動かされる。要するに、彼らは作り話自体 (les fictions en elles-mesme) が好きであってそれ以上先へ進むことはない。作り話とは、見せかけだけが真実で実際は虚偽の話であるから、表面の殻しか目に入らぬ素朴な読者は真実の見せかけで満足し、それを楽しむ。しかし別な種類の読者も存在する。それは物事の根底まで突き進む人々で、小説に関しては、その芸の見事さや悟性的な側面に興味を覚える。従って小説自体が芸術性や工夫、表現などによって自己弁護できない場合には、たちまちその真実の虚像に嫌悪を示すのである。虚偽としての小説が有意義なものとなるためには、聖オーガスタスの言ったように、ある深い意味を内包して真実の比喻 (des figures) となる段階に達しなければならない。

Huet は以上のような立論によって小説の存在理由を人間の (彼流に見た) 本性と関連させ、さらにその帰結として、小説が一地域に成立してから他の地域へ伝播した文芸ジャンルではないと説く。

「議論の余地もないことだが、フランス、ドイツ、イギリスの小説、それに北方の空想物語はいずれも土着の産物で、外部からもたらされたものではない (S. 87f.)」。これは大げさに言えば国民文学の主張のように聞えるが、Huet 本人の意図はヨーロッパにおける小説の主流が母国フランスにあり、イタリアやスペインの宗主権を認めまいとするところにあったようだ。小説理論の先駆

者である Giraldi や Pigna と対決するのもそのためだし、近代小説の祖とされる Cervantes に触れてもわずか数行で片付ける有様である (S. 75)。もっとも、ドイツでは後にこの土着性理論を利用して逆にフランスの支配を脱したドイツ独自の小説論が企てられたこともある⁽¹⁵⁾。さて、フランス小説の優越性を理由づけるのが次の項目である。

E. 主 題

小説の主題を専ら恋愛に限定した理由は詳らかでないが、後代のチボーデの有名な言葉を想起させる (Un roman, c'est où il y a de l'amour)⁽¹⁶⁾。これは一つには Huet のギリシヤ小説愛好に起因するものであろう。ギリシヤの小説は人間の運命がもはや一国の政治、軍事にかかわりなくなった時期に成立した恋愛中心の物語であり、いわば愛だけが人間にとっての運命と見做す時代の産物であった⁽¹⁷⁾。また小説と英雄叙事詩との区別のため Huet が恋愛を時代にふさわしく主題に選んだのであろう (S. 7)。しかしもっとも大きな理由はフランスにおける小説の発達が、女性との社交によって促がされたという彼の見解であろう。その説を要約すると、フランス国民が小説の分野で達成した美事な成果は、男女の自由な交際から生じた Galanterie のたまものである。スペインやイタリヤでは女性は殆ど室内に閉じ込められ、余りにも多くの障害によって男性から引き離されていたから、男女が出逢うことも、また男性が女性に話しかけることも不可能であった。その結果女性の心に阿るような追従を言ったり巧みに言い寄ったりする言葉の技巧が蔑ろにされた。だから女性と出逢う機会も辛抱強く待つだけで、言葉のやりとりをたのしむに至らなかったのである。しかしフランスでは女性は自由に男性とつき合い、自分の心だけが男性の言い寄りから身を護る唯一の頼りだった。フランス婦人たちは「いかなる鍵よりも頑丈で、いかなる鉄格子よりも堅牢な、またいかなる目付け婆の警戒心にも劣らない強固で安全な城壁を築きあげた」。そのため男性たちはこの城壁を取り囲んで攻

(15) ebda. S. 27*

(16) ebda. S. 19*

(17) Hillebrand S. 19f.

め落すために、礼儀作法を洗練し、細心の注意と技巧を用いざるを得なくなった。ここから他民族には殆ど例を見ないような芸 (art) が生まれ、それが小説の中へ流れ込んで結晶したのである。婦人たちが最初に小説の魅力のとりことなったのは自然の成り行きであった。また小説作家もこの読者に迎合し、専ら彼女達の心をくすぐる甘美な恋愛感情を語ったのである。彼女らが余りにも小説を耽読した結果、ギリシヤ、ローマ以来の古典の教養が学ばれず、いわゆる無知の弊害が起る始末であった。フランス小説の独自のあり方はまさしくこの事情に由来するというのが Huet の説明である。彼が恋愛を小説の主題と規定したのは当然とも言えよう。チボーデが『小説の読者』の中で近代小説の系譜を英雄武勲詩と恋愛物語の二源泉から引き出す⁽¹⁸⁾が、Huet は既に250年も前にその一つの源流を明確に探りあてていたことになる。

以上が Huet の小説論の概要である。小説作法の問題としては、小説の描き出すものが「もっともらしいこと」(vraisemblance) と「似つかわしいこと」(bienséances) を持つべきだという要求も顧慮しなければならぬが、委しい説明がなされていないし、彼の時代特有の規範観念⁽¹⁹⁾が掲げる常套文句でもあるので、ここでは取りあげない。

Text- und Literaturangabe

Text: Pierre Daniel Huet: „Traité de l'Origine des Romans“, Faksimiledrucke nach der Erstaussgabe von 1670 und der Happschen Übersetzung von 1682, versehen mit einem Nachwort von Hans Hinterhäuser. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1966

Sekundärliteratur:

Bruno Hillebrand: Theorie des Romans I, Von Heliodor bis Jean Paul. Winkler Verlag München 1972

Rafael Koskimies: Theorie des Romans, unveränderter Nachdruck der Ausgabe Helsinki 1935. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1966

Wolfgang Kayser: Entstehung und Krise des modernen Romans, 3. Auflage, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1969

Gotthart Heidegger: Mythoscopia Romantica oder Discours von den so benannten

(18) Albert Thibaudet: Le liseur de romans 1925 S. 4-6 (In Anlehnung an Koskimies)

(19) Hinterhäuser S. 15*f.

Romans, Faksimileausgabe nach dem Originaldruck von
1698. Verlag Dr. Max Gehlen, Bad Homburg 1969

Aristoteles: Poetik, in der Universal-Bibliothek Nr. 2337 vom Verlag Philipp
Reclam jun. Übersetzung von Olof Gigon, Stuttgart 1961